

留 学 報 告 書

記入日:2020 年 2 月 16 日

所属学部／研究科・学科／専攻	政治経済学部政治学科
留学先国	イギリス
留学先高等教育機関名 (和文及び現地言語)	和文: ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス・アンド・ポリティカル・サイエンス 現地言語: London School of Economics and Political Science
留学期間	2019 年 6 月～2019 年 8 月
留学形態	☒ 大学間/学部間協定留学 ☐ 認定留学
留学した時の学年	3 年生(渡航した時の学年)
留学しようと決めた理由	今回私が留学を決意した理由は、卒業後も政治学の分野でアメリカあるいはイギリスの大学院に進学するだけの興味、そして本当にやっていける能力があるのかを確かめるということでした。昨年大学 2 年時に UC バークレーのサマーセッションに参加して、皆真剣に勉強する姿、いくら勉強しても変な風に見られない、本来学問をする上であるべき環境に取り憑かれました。アメリカやイギリスでは、学問をして、PhD をとるとそれがアカデミアでも民間企業でも非常に価値あるものとみなされます。そうあるべきだと思いますし、そうして国が発展していくのだと思います。 昨年の UC バークレーサマーセッションは、私にとって初めて学問を英語で学ぶ留学ということもあり、納得のいく結果は得られませんでした。そこから一年間、大学 3 年時の春学期にもう一度バークレーレベルのトップスクールに留学し、今度は結果を出す決意し、大学 2 年の 8 月の帰国後から大学 3 年時の 6 月まで日々英語学習と政治学の勉強に取り組んできました。そして、この 2 回目のサマースクール留学で限界まで必死に勉強し、自分はどこまでできるのか、適性があるのかないのかを見極め、海外大学院進学か就職かを決めるというのが留学しようと決めた理由です。
留学のためにした準備、 しておけば良かったと思う準備 (効果のあった勉強法や教材、留学準備に役立った授業等)	LSE はイギリスにある大学ですので、英語力があればあるほど良いでしょう。私は、渡航前 TOEIC 975、英検 1 級、TOEFL iBT 96、IELTS 7.0 でしたが、言語の面でかなりの苦勞を伴いました。この英語力で良い成績を取ることはできましたが、講義、ディスカッションで満足した理解、発言ができるレベルには程遠いのです。また、ファストフード店やレストラン、スーパーなどで英語ができないことにより、かなりの苦勞を伴いました。ですので、できれば LSE サマースクール渡航前に TOEFL iBT 110 か IELTS 8.0 くらいあると良いでしょう。明治大学入学後から一日も休まず勉強を続ければ達成不可能なレベルではないです。驚いたことに、LSE サマースクールには、英語を母語としない学生の中にも信じられないくらい英語ができる人が多くいました。TOEFL iBT を受けたら、120 点満点中 150 点くらい出すのではないかと人たちが多くいました。皆さんが英語の母語話者ではない限り、英語の勉強を続けると留学がより豊かなものになると思います。 もう一つ、普通のアドバイスになりますが、皆さんが勉強したいと思っている分野の知識をどれだけ蓄えておけるかも重要です。LSE サマースクールに来る学生は、優秀な人が多いと思いました。LSE 生はいませんが、GPA3.3 以上という参加基準により、参加者皆各々の大学で勉強してきている人ばかりでした。一度、セッション 1 の授業で教授が「民主化の第三の波」を書いた学者は誰だか、名前が出てこないんだけど誰だっけ」のようにぼそっと言ったときに私は、「あっ、ハンティントンだ、知ってる。勉強してきたかいがあったぞ」と心の中で思ったのですが、アメリカ人学生ほぼ全員が「Huntington」と声をそろえて言い驚きました。普段から彼らは大学で膨大な量の課題をこなし、授業を乗り越えてきています。勿論、これは構造的な問題なので日本の学生が悪いなど言いたいわけではありません。その分、大学外の活動などに時間を当てられるので、在学中に学外で何か活動を積極的にやっている学生は日本の大学生の方が外国の学生より多いのではないかと個人的には思っています。構造上の利点もあるのです。しかし、やはり大学に入ってから学問的な知識、思考能力ではアメリカなどの学生に差をつけられてしまう傾向があります。ですので、渡航前から意識的にそのギャップを埋めるよう努力して追いつき、追い越すことが大切になってくるでしょう。

この留学先を選んだ理由	私は、昨年アメリカのバークレーサマーセッションに参加したことから、今回はイギリスの大学に留学したいと考えていました。そして、アメリカとイギリスと比較して、どちらの国の大学院に進学するか決めたいという思いがありました、その中でも LSE は QS の 2019 年世界大学ランキングで社会科学の分野でハーバード大学に続き世界 2 位となっています。LSE は日本の一橋大学のように理系学部がない大学なので、総合ランキングは QS で世界 38 位となっています。イギリスのオックスフォード大学、ケンブリッジ大学と比べ日本での知名度は劣りますが、間違えなく世界のトップ大学の一つです。ノーベル賞 19 人、53 人の各国首相、大統領、国家元首を輩出しています。私の所属する明治大学政治経済学部は LSE サマースクールと学部協定を結んでいたため、この上ない機会ということで LSE を留学先を選びました。LSE という素晴らしい大学にサマースクール留学でき、非常に嬉しく思います。
大学・学生の雰囲気	LSE はロンドン中心部にあり、大英博物館など近くに有名な施設が数多くあります。社会科学に特化した大学なのでキャンパス自体はそこまで大きくはありませんが、コンパクトにまとまっている分、建物間の移動にそこまで時間がかからないというメリットもあります。観光客もそこまで多くはないので、勉強に集中できます。 次に学生の雰囲気ですが、サマースクールには LSE の学生がいないので LSE の学生はこうだったとは言えません。LSE のサマースクールには今年 8,000 人ほどが参加しましたが、一番多いのがアメリカ人で全体の 5 割ほどを占めます。そのほかはヨーロッパからの学生とアジアからの学生が約 2 割 5 分ずつという感じでした。初めの 7 週間では一度も日本人を見かけませんでした。恐らく 8,000 人中日本人は私を含め 3 人ほどだったと思います。LSE のサイトでこの大学からサマースクールに多く参加しているか見ることができ、UC バークレーや UCLA、Yale の学生も多いです。しかし、一般化は良くないですが、夏休みにイギリスのサマースクールに行き旅行もできるなんて、最高のバカンスだという気分で来ている人も多いです。というのは、彼らが母国で通っている大学では当たり前ですが英語で授業をしていますし、普段の学期ではよい成績を取ろうと必死で勉強しているので、むしろこのサマースクールくらいはゆっくりしたいというのが多くの人の本音です。私を含め恐らく、ほとんどの日本人学生は海外サマースクール留学では、英語も難しい、授業の課題も多いと普段と環境が大きく変わり、「よーしやるぞ」という意気込みで留学に行くでしょう。しかし、彼らアメリカ人にとってそこに大きな変化はないようでした。 アジアからの学生は中国人が圧倒的に多いです。少なくとも LSE サマースクールでは、日本人の 500 倍の人数がいました。中国の人口を 14 億人だとすると単純に日本人より 10 倍多いだけのはずですが、LSE ではなぜここまで人数に大きな差がでるのでしょうか。日本の大学の春学期が世界のほとんどの国の地域とずれていて、体系的にサマースクールに参加しにくいというのが一つあると思いますが、それだけではない気がします。この中国人との関わりを通して、多くのことを考えました。これも私にとって今回の LSE サマースクールのハイライトの一つです。
寮の雰囲気	私は、初めの 1 週間の英語準備コース時は Bankside House に、その後本セッションの 9 週間は High Holborn Residence に滞在しました。どちらの寮も綺麗で、快適でした。本セッション時には、7 個ほどの寮から自由に選べますが、High Holborn Residence はキャンパスから徒歩 10 分ほどと近く、受付の方も丁寧で、さらに朝食を寮内で食べられるので寮選びに迷っている方は、High Holborn Residence をお勧めします。
交友関係	世界のどこにいても私という人間は私でしかなく、大幅に性格が変わることはありませんし、そのままで良いとすら思います。私は一緒にいて心地よい人と一緒にいたい。私は内向的な性格で、日本でも飲み会に行くのが好きではありません。苦痛です。一対一で深い会話をするのは好きですが、大人数でわいわいするのが苦手です。変わろうと試みましたが、それが変わることはありませんでした。故にそれが海外になっても変わることはないです。寮の地下で大量のお酒でパーティーをしている欧米人は元気だなーと通りすぎるたびに気にしていました。もちろん、それを否定しているわけではなく、そのように勉強とメリハリをつけながら、時にみんなでパーティーで騒ぐのもその人たちにとっては魅力的で自分の好きなことをするその人たちの瞳から良い刺激をもらいました。ただ私は、1 ミリもパーティーに参加したいとは思わないのです。日本で飲み会が苦手な私が海外に行ったところでそれが急に変わることはないのです。では、交友関係がなかったかというそういうわけではありませんでした。世界の人口が約 77 億人いることからわかるように、自分と気が合う人は必ずどこかにいるのです。私にとってそれは中国人でした。初めは英語が向こうもネイティブではないから付き合いやすいんだと思っていましたが、そうではなくただ性格が合う人が多いという理由でした。私は、中国系アメリカ人、台湾系アメリカ人で気が合う人にも出会いました。ルーツの問題なのでしょう。故に英語がネイティブでないから付き合いやすいという説はなくなりました。フランス人などヨーロッパ人の中でも気の合う人を見つけるのは難しかったです。去年のバークレーの留学報告書の交友関係欄で私は、「これからは私も欧米系の人を理解して」と書いていましたが、結局 1 年た

	っても変わっていないですね。それでも、中国人には本当に気が合う人が多いです。何かお願いがあると彼らは優しく答えてくれます。私のこの性格も認めてくれます。外向的でなくても尊敬を持ち接してくれます。自分に優しくしてくれる、気が合う人はどこかに必ずいます。私はそういう人を大切にしていきたいです。そういう人に感謝と愛情を伝えて、そういう人に幸せを届けたいです。
困ったこと、大変だったこと	相変わらず英語力が足りず、日常生活で苦勞することがありました。私は、上記の各授業の感想で書いたように、ネイティブに混ざりトップの成績を収めることができましたが、レストランやファストフード店での注文は今でも上手いきません。ファストフード店の「サブウェイ」の注文などはいまだに苦勞だらけです。なんとか IELTS 7.0、英検 1 級くらいだとサブウェイの注文は上手くできません。私は、あと何年したら、英語圏のサブウェイで問題なく注文できるのでしょうか。改めて、英語は専門会話より日常会話の方が圧倒的に難しいと実感しました。その他にも、私はよくスターバックスにサンドイッチを買いに行ったのですが、店員の英語が上手くない客に対する態度が恐ろしいです。露骨に嫌な顔をします。お昼時で忙しいのはわかりますが、もう少し優しく接してほしいです。英語を母語とする人は世界に 3.3 億人しかいないことをわかってほしいです。英語が完璧に話せなくても、優しい目でみてほしいです。世界の共通語が日本語とまではいなくても、中国語くらいになったら、彼ら英語ネイティブスピーカーももう少し理解を示してくれるのかなと思いました。 これは困ったことではないのですが、私は 100%日本人なのにも関わらず、中国人に間違えられる頻度が異常なほど多かったです。欧米人が日本人、中国人、韓国人を見分けられないのは理解できます。私がフランス人、ドイツ人、イタリア人をみただけで見分けられないのと同じです。しかし、中国人学生やレストランの中国人、見知らぬ中国人のおじさんまで中国人の方達が私にいきなり中国語で話しかけてくるのです。2 か月半の滞在中、35 回ほど中国語でいきなり話しかけられました。私は、一度寮を掃除しているイギリス人に「ニーハオ」と意味もなくいきなり言われた時は不快でしたが、中国人に中国人と間違われても全く不快には思わないのです。私が明治大学の第二外国語の授業で習得した入門レベルの中国語で「我是日本人。」と返すのがお決まりのパターンでした。たしかに LSE サマースクールには日本人の 500 倍の中国人がいたので、東アジア人は基本中国人と見なすのはなんとなくわかります。しかし、私が日本食レストランに行ったときに、店員が中国語で説明を 10 秒くらいして、私が「私は中国人ではない」と言ってやっと気が付いた時には、私は本当は中国人なのではないかとさえ思いました。日本食レストランに行ったときくらいは、日本人だと認識してもらいたかったです。ここまでくるとなんだか滑稽に思えてきます。このことを、セッション 3 で同じクラスだった日本人に話したところ、「俺は SOAS というロンドンの大学に 1 年間交換留学していたけど、一度も中国人と間違われてたことはない。」と言っていました。私は 2 か月半で 35 回ほど間違われたので、ほぼ 2 日に 1 回ペースです。私だけなぜか特別頻繁に中国人に間違われるみたいです。繰り返しになりますが、私は交友欄にも書いたように基本的に中国人に好意的な印象を持っているので、「中国人に」中国人と間違われても嫌ではありませんでし、むしろ途中から楽しくなってきました。ただ、終盤からなぜか一周回って、中国人に間違われる割に中国語を満足に話せない自分を恥ずかしく思うところまでできてしまいました。いずれは、間違われた時にそのまま流暢な中国語を話して、何事もなかったかのように流すところまでいけたら面白いと思います。 もう一つ感じたこととして、グローバリゼーションとは何かがあります。私はグローバリゼーションという言葉が好きではありません。もっと正確に言うと西欧人が使うグローバリゼーションという言葉に違和感を覚えます。よく「アジアの台頭などから、グローバル化が進み貿易が発展」のような言葉を彼らが言っているのを聞きます。しかし、いざよりミクロの面、人と人との関係で見たときに彼らは十分なリスペクトを例えば私たちアジア人に示しているのでしょうか。1 度食堂で中国人学生が麺類の注文をしていましたが、英語が上手くなく、少し手間取っていました。そして、その中国人の彼が野菜を麺の上ののせてくれと言うと店員は、セルフサービスだから自分で取るようにと言いました。その前までは野菜を店員がのせていたのにも関わらずです。明らかに店員にしか届かないところに置いてありました。そこで私は、手を思いきりのばして、その野菜をその中国人学生がとりやすいところまで引っ張りました。するとその中国人の彼は私をみて、「谢谢。」と言いました。私は何か悔しさに似たものを感じ涙が出そうでした。西洋人が私たちアジア人をミクロの人間関係の部分でリスペクトして初めて、本当の意味でのグローバリゼーションが達成できるのだと思います。日本でも、白人観光客、白人の留学生に対して、おもてなしの心をもって優しく接する人が多いと思います。それはそれでよいことです。しかし、中国人、韓国人、ベトナム人など同じアジアから日本に来て働いている人や留学生に対してはなぜかネガティブな印象を持ち、白人に対するそれとは違う厳しい接し方をしている人が日本にいるのも事実です。私はそれを変えたい。そして、日本、そして世界中で本当の意味でのグローバリゼーションが達成されると嬉しいですし、私も貢献していきたいです。

学習内容・勉強について	トップスクールのサマースクールで英語ネイティブに混ざりながら、トップの成績を取ることができたことです。エッセイでは、国際関係学の授業で履修者 44 人中 1 位と開発学の授業で履修者 48 人中 2 位を取ることができました。英語のハンデがあってもやり方次第ではネイティブのアメリカ人学生よりも良いエッセイを書き、2 時間の論述試験でも結果を出し、トップの成績を収めることができるのだと自信になりました。海外大学院進学への適性を確認でき、私も向こうでやっていける素質は少なからずあると知れたことが良かったです。 また、改めて私の人生の軸となる生き方を知れたのも良かったです。それは「時間をかけてでも、人の 2 倍はやること」です。セッション 1 で思うような成果を出せなかった時に落ち込みました。自分自身頑張ったと思っていました。自分にできないはずがないと。しかしそこで自分を見つめ直した時に、どこか甘えている、力を抜いている自分がいました。私は器用な人間ではありません。どちらかというと不器用なタイプです。明治大学の友達や LSE にいた学生の中にはスマートに物事をこなす人がたくさんいました。羨ましいと思うこともあります。私は不器用なのでそうはなれません。しかし、不器用なら不器用なりのやり方があると気が付きました。私は勉強だけでなく様々なことにおいて、人の 1.5 倍やってやっと平均くらいになり、2 倍やってようやく人より少しだけできるようになります。3 倍やるとようやくはつきりとした違いが出てきます。このことをセッション 1 終了時に自覚し、セッション 2, 3 の 6 週間はこのことを意識して留学生活を送りました。帰国後も、“時間をかけてでも、人の 2 倍はやること” を常に念頭に置いて過ごしていきたいです。 目標ができたのも良かったです。セッション 2 の Power Shift (国際関係学)の授業で Reading の課題として毎日 2,3 の論文を読んだときに、その著者の偏りに違和感を覚えました。私は、基本的に論文を読む前に著者をグーグル検索するのですが、そのほとんどがアメリカ人やイギリス人の白人でした。国際関係学、国際政治学という分野は世界中を扱います。アジア、中央、東欧その他様々です。にも関わらず、ほとんどアメリカ人やイギリス人というのに違和感を覚えました。私が愛読しているオックスフォードで PhD 生をいらっしやる日本人の方のブログ内でも IR(国際政治)の有名な理論家はほぼ 100%がアメリカ人やイギリス人の白人ということでした。私はそれではこの分野の研究、教育に限りがでてくると思います。そこで私は、ならば私がその状況を変えようと考えようになりました。将来、アメリカで教授になって、アメリカの大学で学生を教えてみたいですし、この分野の学者の本来あるべき多様性に日本人そして、アジア系アジア人として貢献したいと思います。
課題・試験について	上記の学習内容・勉強についてをご参照下さい。
大学外の活動について	LSE サマースクールは、3 週間で 1 学期分の授業をこなす非常に密度の濃いコースです。故に課外活動を行うことは非常に難しいと思います。課外活動を行い人にはあまりおすすめできるプログラムではありません。10 週間の留学中は、大英博物館、オックスフォード大学、近くの映画館、扇風機を買いに家電料品店くらいしか行きませんでした。全てのセッションが終わった後、6 日間ユーロスターという鉄道でフランス・パリとベルギー・ブリュッセルを旅行しました。
留学目的の達成度について (留学を経験して感じたこと、成長したことを踏まえて)	下記の留学を志す人へをご参照下さい。

留学を志す人へ
「これを知っておいて欲しい」と思
うこと、アドバイス等

最後まで大変長い文章をお読み頂きありがとうございました。私が去年書いたパークレーサマ
ーセッションの留学報告書も平均的なものの 5 倍はあったと思いますが、今回のものは更に
長くなり私的な考えも書きました。この報告書は正直なところ将来の私が振り返って、あの時
はこんなことを経験して考えていたなと回想できるようにと思いを込めて書きました。

最後になりますが、これから留学を志す人へこれだけは知っておいて欲しいと思うことをお伝
えて結びとします。留学には各自様々な目的があると思います。一人一人の留学の目的は
個性豊かでどれも素敵です。これは間違いといったことはないと思っています。勉強をするの
が留学の目的の人、世界中の学生達と交流するのが目的の人、または放課後や週末旅行
するのが目的の人、学外で何かボランティアをするのが目的の人、皆素敵で輝いています。
自分で決めた留学の目的を最後まで貫けばそれで良いのです。私は今回、明治大学卒業後
に政治学で海外大学院に進学するかどうかを決めるというのが目的だったので、LSE での 10
週間を勉強に全て注ぐような気持ちでイギリスへ渡航しました。本セッション開始後 4 週目か
ら最後の 9 週目までは毎日、夜 12 時の図書館閉館まで勉強し、一人で夜道を歩いて帰
りました。さすがに 12 になると図書館に残っている学生もほとんどいません。それでも最後
まで楽しかったですし、一人で帰り道、人もほとんどいなかった夜道をスピッツの「ロビンソン」
や中島みゆきの「糸」を歩きながら口ずさみ寮に帰ったことは、一生忘れないと思います。

今、これを読んでいる皆さんに伝えたいことは、自分の一番の味方は自分自身で、どんな時
でも自分を信じ続けられるのも自分しかないということです。留学報告書ということで留学に
絡めると、海外に留学中楽しむこともつらいこともあると思いますが、最後まで自分の可能性
を信じることは止めないで下さい。それともう一つ、私はこの留学で自分を理解してくれる
人、その人たちの前では私が正直でありのままにいられる人たちがいるのだと気が付きまし
た。日本にいたら、その母数は 1 億 3 千万人です。留学して海外に出たら、その母数は圧倒
的に増えます。そして、そこには私を受け入れてくれる人達がいました。その人たちがくれた優
しさ、愛情は他のどんなものにも負けないものでした。私を救いました。だからこそ、私はこれ
からもその人たちに全力で幸せ、愛情を届けていきたいと思っています。皆さんも留学で、生きる
上であなたにとって大切な何かを見つかけられるよう心から願っています。

